

新疆ウイグル 天山北路を行く （新疆労働事情）

須賀 努

この夏、亜細亜大学アジア研究所の調査団に同行して、新疆ウイグル自治区を訪問した。はじめての新疆は非常に刺激的であり、これまで訪れて来た中国の各地とも異なる体験をしたので、その一端をご報告したい。

今回の訪問期間は八月十二―二〇日。ちょうど夏休み中であり、新疆を訪れるベストシーズンと重なっていた。北京↓ウルムチ間は当初予定していた列車のチケットが完売で取れず、飛行機で向かった。機内は中国人観光客で満席、トルファンなどの観光地でも多くの観光客が見られ、旺盛な国内旅行需要が感じられ、内需拡大の一翼を確実に担っていることを強く印象付けられた。

人手不足の新疆

最初に訪れたウルムチ市のレストランには、従業員募集の張り紙が出ていたが、普通の服従員（ウエイトレス）の一月の給与が一、四〇〇―一、八〇〇元（日本円一六、八〇〇―二一、六〇〇円）、皿洗い・清掃員でも一三〇〇―一、八〇〇元（二五、六〇〇―二一、六〇〇円）と表示されていたのには、少なからず驚いた。

中国でここ二―三年一般労働者の賃金が急

激に上昇しているのは周知の事実であり、北京でも三―四年前に最低賃金八〇〇元（九、六〇〇円）でいくらでも雇っていた服従員が現在では二、〇〇〇元（二四、〇〇〇円）を提示しても応募が無いと聞いている。しかし北京や上海ほどの大都市ではないで新疆でこの賃金水準はかなり高いと言わざるを得ない。



ウルムチ市内レストランの求人広告

新疆全体の人口は二、〇〇〇万人、ウルムチ市は三〇〇万人弱。日本から見れば人口が多いように見えるが、中国においては決して多い数とは言えない。何しろ自治区全体の面積は日本の四倍という広大さ、人が点在している印象がある。そして民族的にもウイグル族と漢族が四十五%ずつ、残りは十数の少数民族で構成されており、中国他省とかなり異なった状況にある。

我々が訪ねた新疆ウイグル自治区博物館は新疆に住む各民族についての紹介がなされており、様々な情報を提供してくれている。楼蘭美女と呼ばれる三、八〇〇年前のミイラも展示されている。そこで日本語ガイドをしてくれた若い女性は大連出身の漢族で今年大連外国語大学日本語学科を卒業してこちらに就職したと話す。日本語専攻者の就職先はそれ程少ないのかと少し心配になったが、彼女にとってこの地は意外とチャンスなのかもしれない。

「新疆は今人手不足なのです」、訪問した市内の経済技術開発区の責任者はこう説明した。この開発区の十一次五年計画（二〇一―二〇一〇年）の平均GDP成長率が二十六・四%、そして十二次五年計画終了時にはGDPを現在の三倍にする計画であると聞くと、その経済発展のスピードが理解でき、人手が足りないことも何となく分かる。

その後この開発区内で訪れた農業機械メーカーはトウモロコシ収穫用トラクターなどの製造で急成長、この分野で全国三位の売り上げがあり、既に今年シンセンの創業版への上場を果たしていた。



ウルムチ経済開発区内の農業機械工場

この企業では五〇〇人の従業員の内、一般工員の最低賃金が月給三、〇〇〇元（三六、〇〇〇円）、トップ研究者にいたっては給与がボーナスを含めた年収ベースで一〇〇万円（一二、〇〇〇、〇〇〇円）を優に超える聞き、耳を疑った。一体どんな人が働いているのかと聞くと、一般工員は全て地元の人、研究者も地元の大学を出た人が多いとのことだが、一部は内地（自治区外）から招聘しているケースもあるらしい。従業員の確保は重要性を増している。翌日訪れた医薬メーカーでも最近の給与上昇は毎年十五%以上と述べており、沿海部に追い付く勢いとなっている。

カザフスタンとの国境に近い伊寧県では、大規模な石化プロジェクトが建設中であり、完成時には一六、〇〇〇人の雇用が創出されるとの話があった。その規模は圧倒的であり、従業員は地元では賄いきれないため、大規模な宿舍及び食堂が同時に建設されていた。資源を利用した大規模開発も増加しており、益々人材需要が高まり、そのコストも上昇すると思われる事例であった。

流入する高学歴人材

また今回の企業訪問に同行してくれた開発区の若手は実に標準的な北京語を話していた。聞いてみると、山東省出身で何と清華大学を卒業していると言う。ウルムチまで来て就職した理由を聞くと「特に他省に比べて待遇が良いわけではない。ただチャンスは非常に大きいと感じている」とのこと。経済成長が鈍化した沿海部に比べて、内陸部の急成長を象徴する言葉であった。

ウルムチから西に一五〇km、石河子市にも立ち寄った。ここは中華人民共和国建国後、新疆の治安維持と開拓のために組織された新疆建設兵団（日本でいえば屯田兵）が開拓した都市。街に入るとなぜか一九八〇年代、九〇年代の懐かしい中国の都市に出会う。人口的な都市だからだろうか。

ここで我々を案内してくれた青年も、山東省からウルムチの大学に進学、大学院を卒業しても内地へ帰らず、石河子市の役所に勤めていた。「新疆には未来があります。それに今中国で公務員になろうと思ったら、場所は選んでいられませんよ」という率直な答えが返ってきた。

既にこの地にマンションを買い、後は結婚してずっとここで暮らすと言う。

中国にも大学生の就職人気企業ランキングと言うものがあり、今や外資系企業は押し付けられ、大手国有企業の名前がずらりと並んでいるが、学生の本音は企業に就職するのではなく「公務員」が一番。新疆にとって、高学歴人材を補う意味では公務員人気は追い風なのだろう。それにしても我々のアテンドに奮闘し、飲めない酒を飲み、酔いつぶれた彼を見て、非常に懐かしい気持ちになった。

少数民族の雇用状況に関しては、今回それ程触れる機会がなかったが、役所や大学などの機関では民族間のバランスにもかなり配慮があると聞いた。またイスラム教に見られる金曜日礼拝やラマダンの扱いには注意が必要。実際に我々が訪問中はラマダンであり、自治区政府が通常の業務を促しても、信仰の観点が優先している場面もあり、またこれを規制すれば当然衝突が起るため、適度に柔軟な対応をしている所が見られた。

新疆の労働事情を見ていくと、①他省と比べて人口が少なく労働力不足②急速な発展のスピードに人材が追い付いていない③相対的に賃金は高め④民族間の運営には慎重を期する必要あり、という印象を持つ。その結果、原材料は現地で確保するも労働集約型ではなく、機械化により生産性を向上させる産業が目についた。因みに現時点で日系企業の進出は殆どない。

（すがつとむ・コラムニスト

／アジアアンウォッチャー）